

「とべたかな？ さあ かこう!!」

— 第1学年 想画「ハングライダーにのってそらをとぼう」の授業実践を通して — 中 神 裕 子

1. はじめに

子ども達は、表現活動を好んでいる。これは、10年前も今もそう変わらない。しかし、表現に対する子どもの意識や姿勢は少し変わってきているのではないか。つまり、最後まで続かず、ちょっと難しいことに会ったりつまずいたりすると投げ出してしまう傾向があるようだ。特に自分自身の心・内面を出しきる絵画表現になると、集中力に欠けるという傾向が強い。これは児童を取りまく環境が、どんどん変わってきていることにも原因があるといえる。遊び場も、遊びもなくなり、子ども自身が自分から動く場が少なくなったかわりに、どんどん増えているのは、テレビや漫画、ファミコンなどから伝えられる様々な情報と視覚的映像。子どもは、ただ受け身になっていればよいという現代の状況が、子どもが自ら求めて表現するという活動を奪っているのではないだろうか。

子どもが自ら求めて表現することにより、感性は豊かになり、新しいものを創造する力が育ってくる。そのためには、学習の中で、子ども自身が、めあてをはっきりとらえ、追求する場の構成が必要であると考え、本年度は特に「想画」に焦点をあて、研究をすすめた。

2. めあて追求のために

図工科における、めあてを追求する場の構成とは、子ども自らがめあてを設定し、そのめあて追求のための自発的・積極的活動ができる場を構成してやるということである。

めあては、その題材全体にかかわるものと、一単位時間ごとに設置するものがある。したがって、めあての追求も、題材全体を通しての追求と、一単位時間における追求との二面が考えられる。その両面の追求の相乗効果により、題材全体として、より質の高い追求となっていくのである。

そこで、自ら求めて表現する子どもを育成するために、次のような研究仮説をたてた。

- | | |
|------|-----------------------------------------------------------------|
| 仮説 1 | 子ども自らの思いがくみあげられためあてであれば、表現意欲は持続するであろう。 |
| 仮説 2 | 低学年であっても、活動の中に発見や次のめあてを生むことができるものを仕組んでやれば、より質の高い豊かな表現をしていくであろう。 |
| 仮説 3 | 子ども相互の支えあい・励ましあいの場を設けることにより、表現意欲は高まり満足感を得ることができるであろう。 |

以上3つの研究仮説を検証するため、「ハングライダーにのってそらをとぼう」という一題材を取りあげ、題材全体を通しての追求と一単位時間における追求の両面から考えてみた。

以下、その実践について述べることとする。

3. 授業の実際 第1学年 「ハングライダーにのって そらをとぼう」

(1) 題材について

ハングライダーに乗って空を飛ぶというテーマの本題材は、現実と想像が同居している低学年にとっても、そのものになりきって主体的に表現しやすい題材であり、さまざまな想の拡大と新鮮な空想が期待できる題材である。

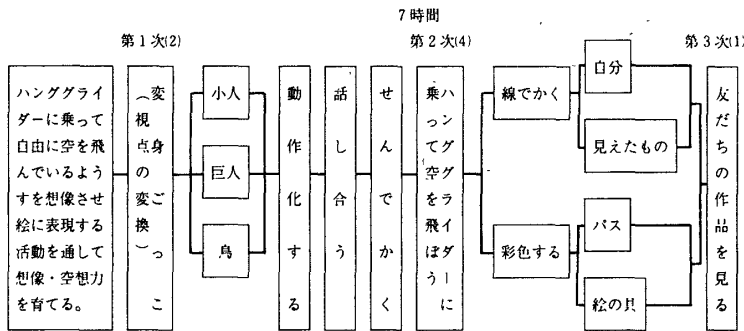
こういう想像的・空想的表現の経験を積み重ねることによって、豊かな想像力を伸ばすことができ、創造的心情の啓培につながると考える。

(2) 仮説検証のための方策

① 題材全体を通して

この題材は、第一次・第二次・第三次の三つから成りたっており、全体から見ると、第一次着想、第二次 構想・表現（追求）、第三次 鑑賞（まとめ）という流れになっている。

指導内容と計画は、次のとおりである。



(変身ごっこ)

ア. 仮説に対する方策

① 仮説1に対する方策

第一次着想段階において、話し合いと動作化の中で、子ども自らの思いをくみあげ、めあてを作る。

② 仮説2に対する方策

第二次構想・表現段階において、めあてをより一層追求させるため、活動の中に発見や次のめあてを生むことができるものとして、動作化に加え、VTR視聴を入れる。

③ 仮説3に対する方策

第三次鑑賞段階において、子ども相互の支えあい励ましあいの場として、個々の思いを伝えることのできる鑑賞の場を設定する。

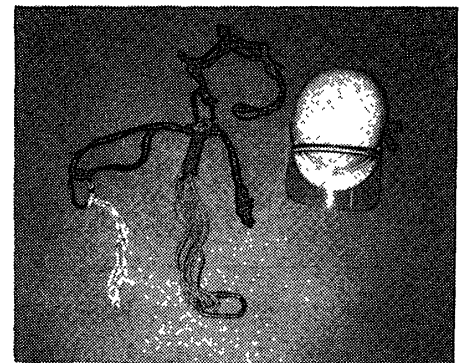
② 一単位時間において (第二次 第1時)

ア. 仮説に対する方策

① 仮説1に対する方策

着想段階において、ハングライダーに対する興味・関心を喚起する。(自分も飛びたいなあ)

- 初めて見た驚き
- 教師の服装
(ヘルメット・ジャンプスーツ・手袋・
身体確保ベルト (ゼルブスト))



② 仮説2に対する方策

構想段階において、ハングライダーに乗って飛んでいる自分のイメージを拡大化させ、焦点化していく。(飛んでいる自分になりきる)

- 飛んでいる気持ちになる映像 (なるべく大きなもの)
- 動作化

㉓ 仮説3に対する方策

構想段階、鑑賞段階において、それぞれの想を認めあう雰囲気を作る。

- 自分の思いを話す場
- 友だちの作品の良いところを見つけさせる。

以上、3つの仮説に対する方策を講じた一単位時間の授業を設計した。

イ. 本時の目標

- ハンググライダーに乗って空を飛んでいる自分になりきらせて、想像させる。
- ハンググライダーに乗って飛んでいる自分の姿と、自分の飛んでいきたいところを、ゆっくりとした線でかかせる。

ウ. 準備

(児童) パス

(教師) ハンググライダー模型(大・小) VTR, 大型VTR映写装置
ヘルメット, ジャンプスーツ, 固定金具(命綱)
四つ切り画用紙, 画板

エ. 指導過程

学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点	学 習 展 開 の 教 師 の 意 図
<p>1. ハンググライダーについて知る</p> <pre> graph TD A[ハンググライダーについて知る] --> B[形] A --> C[色] A --> D[働き] A --> E[しくみ] E --> F[人間が乗る] </pre>	<p>1. 着想段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ ハンググライダーのイメージをはっきりさせるためハンググライダーの実物模型を用意しておく。 ◦ 模型には布をかぶせて児童の目にはふれないようにしておき初めて見た驚きを大切にさせる。 ◦ 教師がハンググライダーに乗る服装をしてみせる。 	<p>(1) 実物のハンググライダーを見て、日はくざびけになり驚きの声を発すれば、興味・関心が喚起されたといえる。</p> <p>(2) ハンググライダーだけに目が向いた興味・関心から、自分も先生みたいな服装をして乗ってみたいという気持ちになるであろう。</p>
<p>2. ハンググライダーに乗った自分を空想する</p> <pre> graph TD A[ハンググライダーに乗った自分を空想する] --> B[動作化する] B --> C[話し合う] C --> D[自分のようす] C --> E[まわりのようす] </pre>	<p>2. 構想段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ ハンググライダーに乗っている自分になりきって空想させるために、VTRを見せる。 ハンググライダーの飛ぶ姿 } 両者がはっきり乗っていて見えるもの } するVTR ◦ 臨場感をださせるためVTRテレビは、大きなものを用意する。 ◦ 乗っているつもりで動作化させる。 ◦ 自分やまわりのようすを友だちと話し合わせるによりよりいっそうイメージをはっきりとさせる。 	<p>(3) 映像を見て無意識のうちに声を出したり、乗っている格好をするであろう。</p> <p>(4) 無意識から意識的に格好をすることによりイメージ拡大させる。</p> <p>(5) 友だちとの話し合いの中で、自分の飛んでいる姿・飛んで行きたい所がはっきりしてくるであろう。</p>
<p>3. 線であらわす</p> <pre> graph TD A[線であらわす] --> B[自分のようす] A --> C[まわりのようす] </pre>	<p>3. 表現段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 白いパスのみ取り出させ、ゆっくりとした線でかかせる。 ◦ ハンググライダーに乗っている自分と、飛んでいきたいところの両方が画面に入ることを条件とする。 ◦ 机間巡視して想のまとまらない子の個別指導にあたる。 	<p>(6) 置いてある実物模型や、上からつりさげている模型を見せたり、動作化をさせれば、表現への抵抗は少なくなるであろう。</p>
<p>4. 友だちの作品を見合う</p> <p>5. あと始末をする</p>	<p>4. 鑑賞段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 友だちの作品の良いところを見つけ認め合わせるにより次時への意欲づけをはかる。 	<p>(7) 本時のまとめであり、次時の線描のつづき彩色の意欲につながる。</p>

オ. 学習の流れと子どもの反応

⑦ 着想場面において (興味・関心喚起)

布をかぶせたハングライダーを見せ、いろいろ予想させたところで、布をとってみせたが、期待したほど、驚きはなかった。子どもがぐっと引きこまれ、集中していったのは、教師が、ハングライダーに乗る服装をしてみせたところからである。

T. 「先生ね、このままでも飛べるんだけど、このまま飛んだらどうですか。」

P. 「あぶないよ」「ふくがよごれる」「おちる」「頭をうつ」「足のほねを折っちゃう」

T. 「そうですね。あぶないので、服装があるんです。今日は飛ぶつもりで、その服装を持ってきました。」と着はじめる。

P. 「あーっ」(一斉にどよめき)

T. (みんなの前で袖を通しながら)「どうですか。」

P. 「カッコいい」(にぎやかな笑い声)

T. 「体をちゃんとハングライダーにくっつけとかなんてはいけないので、こんなつなをつけます。」「これが、命の綱なのです。」(後ろむきで見せる)

P. 「あーっ」

T. 「頭を打ちちゃうからー」

P. 「ヘルメット」「ははは、おもしろい」

T. (実際に、ハングライダーを持つ)

P. 「あぶない」「わあーっ」「ほんまに飛ぶかも知れん」

T. 「こういうふうにして風を待つよ。上に上がることもあるし、ゆれたり、下に向けていったり。」

(実際に、傾けてみせる)

T. 「どうですか。中神先生、とべそう?」

P. 「うん、とべそう」「とべそう」「とぶとこ見てみたい」

T. 「今日は、先生だけでなく、皆さんもハングライダーに乗って、空を飛びます。」

(「ハングライダーにのって空をとぼう」のカード提示)

P. 「えーっ、えーっ」(驚きと喜びの入り混じったどよめき)

⑧ 構想場面において (拡大化)

T. 「ハングライダーに乗ったら、どんなふうになるのか、ビデオをとりました。みんなも、飛んでいるつもりで見てみてね。」(大型テレビに映す)

P. (ハングライダーに乗る前の姿、乗ったと見える風景など、一心に見る。一緒に動作はせず、見るだけで精いっぱい)

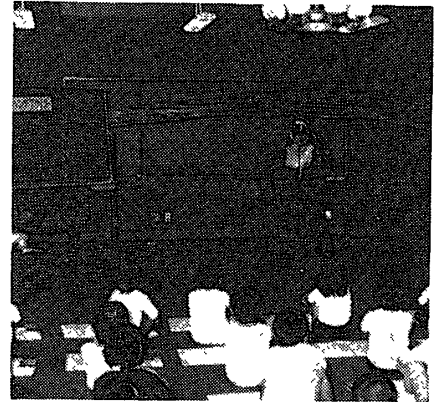
T. (高度が上がったり、急降下したり、曲がったりなどの変化が見られるところから)

「じゃあ、みんなも、今度は一緒に飛んでみるよ。恰好してごらん。」

P. (ほとんどの子どもが、腕を前に出して、棒もち飛ぶ恰好をする)

(急降下の画面で——腕を下にしつつ)

「わあーっ、きゃあーっ」「あぶないよ」



(曲がりくねる画面で——腕を右へ左へゆらしつつ)「きゃあ、目がまわるよ。」

(アメリカの自由の女神の画面で)「あっ、あれ知っとる。」

T. (草原を走るポニーを上から見る画面で,)「手をふってあげよう。」

P. 「あっ馬」「ポニーに乗ってる」「おーい」(みんな、うれしそうに手を振る)

T. 「じゅあ、そろそろ降りますよ。」

P. 「あーあ、やっと帰った」

T. 「ハングライダーに乗った気持ちはどうでしたか。」

P. (ほとんどの子が、勢いよく手をあげる)

「気持ちよかったです。」

「いっぱい風が吹いてから、髪がバァーとこうなってから(身ぶり)、すごい涼しかったから、心臓がギクッと止まるかと思うた。」

「おもしろかったです。」「なんか、海に落ちそうになりました。」「ポニーに乗っている人がいたので、バイバイって手をふって、楽しかったです。」

T. 「どんな恰好で、飛びましたか。」

P. 「急降下の時、こうやって……。」(手を前に出し、足をのばした恰好をする)

「スッパマンみたいなかっこうで、飛びました。」

「飛んだ時、足を少し曲げて飛びました。」

(焦点化)

T. 「今度は、みんなが本当に飛んでいきたいところに行きますよ。さあ、みなさんは、どこへ飛んでいきたいですか。自分の飛んでいきたいところを、頭の中にうかべましょう。」

P. (目をつむる。手を目にあてたり、顔をふせたり——)

T. 「頭の中に浮かびましたか。」

P. 「はい、はい」(元気な声)

T. 「では、立って下さい。」

P. (全員立つ。何が始まるのだろうかという顔をしている子もいる。)

T. 「飛ぶためには、まず恰好をちゃんとしようね。では先生といっしょに、はきますよ。」
「ジッパー、……金具……シッポ……」

P. 「わあ、変身だ」(子どもたちは、どの子も、一生懸命、動作化する。金具がしっかりついているかどうか、キュッキュッと引っぱりあげる動作まで——すっかりなりきっている。)

T. 「ハングライダーを持ちあげるよ。ぐうーっと。」

P. 「ぐうーっ」(力が入った声)

T. 「風がくるのを待とうね。風がこなきゃ、フワーっと乗れないからね。」

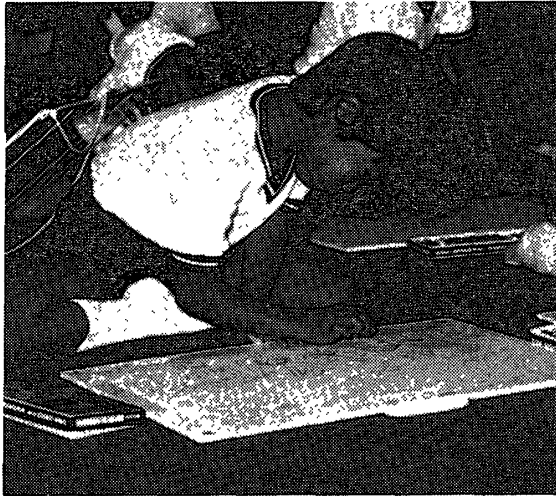
P. (子どもは、しっかり中腰になって、前方を見つめている。)

T. 「あっ、風が吹いてきた。いい風だ——。そら、飛ぼう。」

P. 「ふわぁん」(自然に、声が出る。浮かびあがるような動作も)

T. 「さあ、何が見えるかな。」

P. (飛ぶかっこうをしながら)「川」「小さく見える」「UFO」「入道雲」
(途中、手をかざしたりしながら、わいわいと楽しんで、飛んでいる。)



T. 「さあ、そろそろ帰りますよ。」(トトトと、走りながら止まる恰好)

T. 「みんなはどこなところへ行ってみたの？」
 「飛んでいるつもりになって、絵をかきましたよ
うね。」

P. (最初のうちは、みんなの様子を見ている子、楽しそうにとなりの子に自分が見たものを話している子、相談している子もいる。が、ほとんどの子は、さっと取りかかる。かきすすめるにしたがって、声は少なくなる)

(3) 結果と考察

前述の第二次1時のような「追求」を経てできあがった作品と、それ以前の作品(第一次2時、を比較していけば、おのずから、仮説に対する検証になると考え、両者の作品内容の比較検討を行った。

① 作品に描いていたもの

第一次第2時の作品(以下1枚目とする)は、変身ごっこをする中で、子ども達の「鳥になりたい」という願いをとりあげ、屋上へ上がって動作化をさせた後、描いたものである。自分達の思いがくみあげられたということで喜んで描いたが、その内容を見ると屋上の上から見えたものにとらわれすぎていることがわかる。(右図参照)動作化は、子どもの活動を活発にするけれど、それだけでは限界があるといえる。

第二次第1時では、第一次を受けて、めあてをより一層追求させるため、活動の中に、発見や次のめあてを生むことが、できるものとして、動作化に加え、VTR視聴を入れた。その結果が、上図「第二次第1時後の作品(以下2枚目とする)に描かれているもの」である。1枚目27種から、2枚目50種と、倍近く種類が増えており、学校のまわりから、もっと目が広がっていき、子ども達一人一人の個性が表われたことがよくわかる。想が広がっていったということで、VTR視聴が、追求のきっかけとなったといえる。また合わせて、第一次の着想段階が、このような作品を生む重要な素地になっていたとも考えられる。

② 描いている内容から

1枚目と2枚目の内容をもっとくわしく見ていくことにする。内容の深まりが、もっとも、顕著に表れるのは、自分自身の表わし方であると考え、1枚目の自分自身(鳥)・2枚目の自分自身(ハンググライダーに乗っている自分)を、どう描いているかを見てみた。

1枚目の作品では、何が見えるかばかりに目がいており、鳥になった自分を描いている子

第一次第2時の作品に描かれているもの	第二次第1時後の作品に描かれているもの
①ビル ②鳥 ③人 ④遊具 ⑤山 ⑥雲 ⑦学校 ⑧川 ⑨木 ⑩家 ⑪車 ⑫太陽 ⑬橋 ⑭運動場 ⑮屋上のさく…… 以下 魚、店、池、電信柱、公園、プール、えんとつ、畑、海、くじら、ぼうし、りんご 計27種	①ハンググライダー(全員) ②人 ③木 ④家 ⑤山 ⑥鳥 ⑦ビル ⑧太陽 ⑨雲 ⑩動物 ⑪川 ⑫車 ⑬花 ⑭けむり ⑮魚…… 以下 自由の女神、にじ、橋、遊具、えんとつ、公園、池、城、信号、海、流れ星、日の丸、工場、外人、タワー、きこり、火山、遊園地、船、学校、階段、くじら、田んぼ、UFO、滝、灯台、気球……等々 計50種以上

(1枚目)



1枚目は、遠近法を用いた風景、1年生の描く絵とは、とても思えない。頭で描いている部分が多い。

2枚目、ハンググライダーにしっかりとつかまっている自分を大きく描いた子どもらしい作品になっている。

動作化、話し合い、VTR視聴などの追求過程を経て、自ら求めて表現した作品の例である。

④ 鑑賞後の子どもの感想から

第三次、お互いの絵を見せあい、良いところを見つけあうという鑑賞の時間を設定した。

子どもの感想を聞いてみると、自分のを見てもらったり友だちの作品が見れてとても良かったという子が28名、まあまあ良かったという子が7名、良くなかったという子が3名であった。良くなかったという子の理由は、まだ完全にしあがってなかった、はずかしかったということであり、全くないやというわけではなかった。

このような鑑賞の時間等を通して、低学年のうちから認めあう雰囲気づくりを大切にしていこうとすることが、自ら求めて表現していこうとする子どもを育てる一つの力となっていくと考えている。意欲的な「自分」の陰には、支えられている「自分」があるということ、を、少しずつでも自覚させていかねばならない。

以上、1枚目と2枚目の作品の比較検討・子どもの感想等から、最初にたてた研究仮説は、大まかな点では、検証されたといえるであろう。

ただ本題材を終わってみて反省しているのは、追求場面である第二次第1時の授業の、表現に入る直前の教師の発問「飛んでいるつもりになって、絵をかきましょうね。」である。発問するまでもなく、子ども達は十分に意欲をもち、自分の飛んでいったところをみんなに伝えたいという気持ちになっていたはずである。教師の側から一方的に出さなくても、子ども側からの「絵をかいて教えてあげるよ」という気持ちを引き出すことは可能であった。そういう気持ちを引き出すことが、「自ら求めて表現する子どもを育てる」ことになるのである。結果的には、教師の発問にかかわらず、子どもは主体的に表現していったが、教師が子どもを引っぱりあげるという意識ではなく、子どもの伸びる力に手を貸し支えるという意識を常に持って子ども達に臨まねばならぬことを再認識した。

(2枚目)



(作文から)



ハンググライダーのって、そらをとんたよ、ハンググライダーのぼつをいかりちたよ。女のそが手をりてくれたよ。びんやいえにけむりかててたよ。山が見えてよ。いえないろんなまどかあ、たし、くもがいろんなのかあ、たし。いえが三よくもつないでい、たいえもあ、たし。びんが一つ、つかり、つかちかていたのよ。たやけてお日まかかくれし、たんよ。たやけにな、たから、いそいでかえりました。けむりがいんいんてきてました、ちよつちよとんでいたよ、は、は、かちらちらおちてきました、ハンググライダー。たのし、か、た、また、いきた、いなあ。